



みんなで守ろう、地区の安全、 区民の命



熊本県菊池市藤田区自治会元会長
(防災会顧問、市認定防災マイスター) 高木 良一

1 地域の特性について

私たちの地区は、熊本県北部の菊池市郊外に位置し、地区の北側を1級河川の菊池川が地区内中央をその支流の河原川が流れ、周囲は傾斜地の山林に囲まれる自然豊かな地域に約100世帯、280名程の住民が穏やかに暮らしています。

反面、災害リスクの視点で見ると、別の姿が見えてきます。熊本県のハザードマップでは、菊池川の「想定最大規模浸水深」で居住区域の大部分が浸水域に指定されているほか、傾斜地の大部分も崩壊・特別警戒区域や土石流想定区域に指定され、豪雨等による大きな災害リスクが想定されています。

2 自主防災組織の設立と その後の活動

(1) 自主防災組織の設立

地域の特性や自然災害の激甚化等も踏まえ、「災害から区民の命を守る」ことを目標に、平成26年9月、当時の自治会長の主導により「藤田区自主防災会」(以下「防災会」という。)を設立しました。翌年の平成27年3月には第1回避難訓練(古来の災害神事と連携)を実施し、以来、10年余にわたる活動を通じて、区民の防災意識等の向上に取り組んでいます。

(2) 組織運営等の特徴

① 住民参加による運営

防災会の役員や構成員は、多くが地区運営の主体となる自治会の役員等を兼ねています。このため、毎年交代しながら多くの

区民が防災会の役員等を複数回経験しており、活動年数を重ねるごとに防災意識の醸成や避難訓練等における役割遂行の習熟につながっています。

② 夏祭りで培われた地域の絆

当区では7月の最終土曜日に、「藤田夏祭り」と題するイベントを実施しています。区民有志による完全自主運営で、20年以上も続く地区の一大イベントの一つですが、改めて振り返ると、自主防災活動が設立当初から円滑に動き出した大きな要因の一つに、ここで培われた共に助け合う意識(絆)がベースになっていると感じています。



夏祭りの様子

(3) 熊本地震～やってよかった避難訓練～

設立後間もない平成28年4月に熊本地震が発生しました。夜間の発災に加え、停電で避難の呼び掛けや光源の確保もできない状況の中で、直前の3月に行った第2回避難訓練そのままに、地区の自主避難所(公民館)において安否確認、被害把握等を一人の負傷者もなく実施することができました。

このことは、日頃の訓練の大切さを認識

する一つの成功体験となり、今日まで続く活動の原動力ともなっています。その後も、消防署等との連携も図りながら、避難訓練に付加する形式で、年ごとに消火訓練、AED操作などの取り組みを続けています。また、防災用品等の収納倉庫の設置、停電を想定した大型発電機（投光器付き）の整備、ヘルメット・ベスト等の整備を進め、避難訓練等での活用を図っています。



避難訓練の様子



防災倉庫

3 新たな課題と取り組み

(1) 逃げ遅れ対策（分散避難訓練の取組）

熊本県では、平成30年12月に「洪水浸水想定区域図（最大想定規模）」を公表しており、その中で当区の主要部分は5m以上の浸水域となっています。

一方で、専門家等の協力を受けながら行った区民への「豪雨災害等からの避難に関するアンケート」の結果を見ると、「大丈夫と思った。」「災害の経験ないので必要ない」など、強い正常性バイアスが示さ

れていました。

このため、前自治会長の主導により、高台の農業倉庫を避難所として確保したほか、専門家のアドバイスを受けながら、逃げ遅れた場合の緊急避難対策として、区内の高所4箇所新たな避難所を確保し、分散避難訓練を実施しています。

(2) 「避難スイッチ」の整備

また、熊本県立大学の協力を得て、区内の河原川に夜間も視認可能な監視カメラを設置したことで、自宅に居ながらスマホで河川の状況を確認できるようになりました。いわゆる「避難スイッチ」として活用しています。



監視カメラ

4 今後の課題

令和2年7月に熊本県南部の人吉球磨地域等で発生した球磨川大水害の状況をみるにつけ、自然災害の激甚化は、千年に一度程度の豪雨災害や巨大台風の発生等が現実になりつつある状況になっています。

このような中で、当区においても少子高齢化は年々加速しており、今後、防災意識の啓発等これまで積み上げてきた対策や地区防災計画に基づき、「後継者の育成」、「高齢者に早期避難の意識と行動の浸透」を図るなど、区民一体となって「命を守る活動」に取り組むと考えています。